すみだ郷土文化資料館だより MIYAKODORI

みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、
すみだを舞台にした和歌に登場するなど
墨田区にゆかりのある鳥です。

すみだ
郷土文化
資料館
SUMIDA
HERITAGE
MUSEUM

第72号 2025年(令和7年)8月発行

ふるさととの出会い、ときめきへの旅。
すみだ郷土文化資料館
131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号
☎(03)5619-7034 ㏫(03)3625-3431
電話番号は正確に。
https://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/index.html
E-mail sumida-htm@city.sumida.lg.jp

■開館時間
午前9:00～午後5:00(入館は午後4:30まで)
■休館日
毎週月曜日(祝日に当たるときは翌平日)
毎月第4火曜日(祝日に当たるときは翌平日)
■観覧料
個人100円、団体(20人以上)1人80円、
中学生以下、身体障害者手帳・愛の手帳・
療育手帳・精神障害者保健福祉手帳を
お持ちの方及び介助の方は無料

「蒙古賊舟退治之図」歌川芳虎　文久3年(1863)　立正大学古書資料館所蔵
弘安4年(1281)、博多湾侵攻を試みた元・高麗軍の軍船が台風によって沈没する場面。右上には日蓮の記したと伝わる日月対の旗曼荼羅が描かれる。

企画展 よみがえる名所 押上 最教寺の世界 ―かえってきた仏像たち―

会期：令和7年10月4日(土)～12月7日(日)

■押上の名所 最教寺

墨田区は、昭和22年(1947)に向島区と本所区が合併して成立しましたが、この二つの地域は異なった歴史を持っています。北部の向島区が古代以来の地形を引き継いだことに対して、南部の本所区域は、隅田川河口に形成された大型の砂州・牛島が広がっていました。江戸時代になって徐々に開発され、明暦の大火(明暦3年／1657)後の本格的な開発によって、現在の本所深川地域の地形となったのです。

そのため、17世紀の本所地域には、町人や武士の住宅のほか、寺社が移入、また創建され、やがてそれらは新たな名所となって人々を集めました。

旧押上村の天松山最教寺(日蓮宗)もそうした名所のひとつです。地誌類からは、江戸時代の最教寺が、身延山の守護神である七面明神や、日蓮の筆と伝わる旗曼荼羅に基づいた信仰によって著名な名所となっていたことがわかります。

最教寺は、安政江戸地震(安政2年／1855)で伽藍(がらん)を焼失したため衰微したとされます。その後、明治35年(1902)に玉泉寺(浅草北松山町)寺主の豊田上人が招聘され、玉泉寺と最教寺を併合して最教寺29代となりました。しかし、関東大震災で全山焼失し、大正14年(1925)に豊多摩郡杉並町大字高円寺(現・杉並区和田3丁目)へ移転し、昭和40年(1965)には、境内地が環状七号線の建設地に含まれたため、現在地(八王子市宮下町)へ移転しました。

すみだ郷土文化資料館では、平成30年(2018)以降、最教寺ご住職茂田井教洵氏のご協力を得て、什物調査を行ってきました。本展示では、その調査成果とともに江戸の名所最教寺について紹介します。

■最教寺と旗曼荼羅信仰

『新編武蔵風土記稿』によれば、最教寺の起源は慶長元年（1596）にさかのぼります。寺伝では、上野池之端の日崇が、徳川秀忠の娘千姫の病を祈祷によって治癒したことから押上村に境内地2500坪（現在の業平3丁目5～8付近）を拝領し、寛永年間（1624～44）に建立されたと伝わります。このとき、千姫の法号「天樹院殿栄誉源法松院」と日崇の房号「最教房」にちなんで天松山最教寺とし、開山に師の身延山久遠寺第27世日境を迎えました。

このとき、開山の日境は、身延山久遠寺より一幅の旗曼荼羅を携えて押上村へ移転しました。この旗曼荼羅とは、弘安4年（1281）の蒙古襲来にあたって、日蓮が書いたとされる旗曼荼羅です。

蒙古襲来（元寇）は、文永11年（1274／文永の役）と弘安4年（1281／弘安の役）の2度にわたりモンゴル軍（元・高麗連合軍）が福岡県・佐賀県・長崎県の北部沿岸地域に侵攻した出来事で、経由地の対馬・壱岐は甚大な被害を受けました。

「本化別頭高祖伝」享保21年（1736）
旗曼荼羅が最教寺に伝来することを記す。本資料以降、日蓮の伝記において、旗曼荼羅の記載が記される。

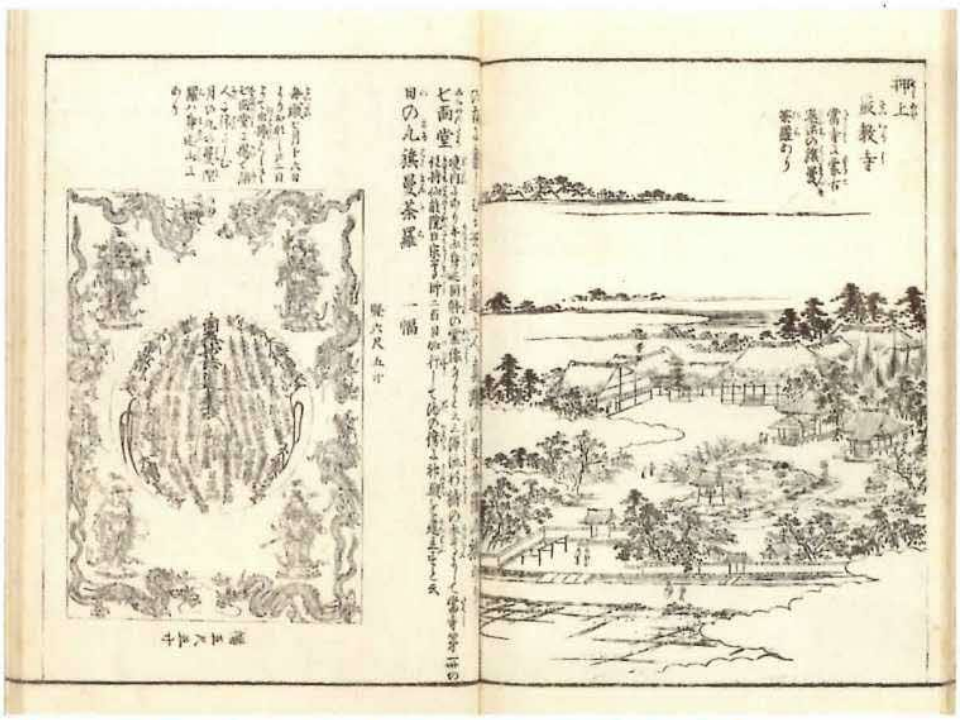
伝承によれば、弘安の役の際、蒙古退治の守護として、日蓮は日月一対の旗曼荼羅をしたためました。宇都宮貞綱は六波羅から派遣された軍勢の大将として筑紫（福岡県）へ向かい、浜の見える山上に日月の旗曼荼羅を押し立てたところ、蒙古軍が大嵐によって海に沈んだといわれます。貞綱は、のちにその由来を記して、この一対の旗曼荼羅を身延山へ奉納したと伝えられています。

最教寺に伝来する旗曼荼羅は、この日月一対のうちの「日の旗曼荼羅」です。

『江戸名所図会』では、これを「日蓮上人真蹟の曼荼羅」としており、一年に一度7月16日から22日まで、虫払いとして境内の七面堂に掲げて人々に拝観させていたことが記されています。深見要言による「蒙古退治旗曼荼羅記　全」（文化13年／1816）は、旗曼荼羅の所在と由緒、御利益を叙述した版本です。特に、「茲（ここ）に不思議の物語あり、心を静めて聞給へ」という書き出しからは、聴衆や参詣人に対して、旗曼荼羅の由来と法華の功徳を説き広めている様子がうかがえます。旗曼荼羅信仰は、幕末のペリー来航の際に注目され、各地で最教寺や身延山に伝わる日月の旗曼荼羅の開帳が行われました。

蒙古を退けたという旗曼荼羅の伝説は、火難厄除の功徳が強調され、やがて近代になっても鉄砲除けの守りとして信仰されるようになりました。

「日の旗曼荼羅」すみだ郷土文化資料館（複製）・最教寺所蔵



「江戸名所図会」天保5～7年（1834～6）　境内の池の傍に七面堂が描かれている。

「箱書（日の旗曼荼羅収納）」
最教寺所蔵　最教寺什物撮影：萩原哉氏

■伝えられた仏像たち

江戸の名所となった最教寺は、安政江戸地震と大正12年（1923）の関東大震災によって甚大な被害を受け、墨田区外へ転出しました。近年の調査では、日の旗曼荼羅のほか、江戸時代に制作された仏像が大切に保存されていることがわかりました。

日の旗曼荼羅の伝来については、現在収納されている箱書に記されています。それによれば、関東大震災の折、住職が不在であったため、総代の石川兼吉氏が命がけで旗曼荼羅を持ち出しました。しかし、寺門を出ようとした時に火を受けたため、「中央輪圓」すなわち中央の曼荼羅部分を破り取って持ち出し、のちに補修したとあります。ここから、現在の最教寺に伝わる旗曼荼羅の表装は、大正末年以降に補修されたものであることがわかります。

実は、先述の関東大震災による被害もあり、江戸時代の最教寺内部の様子については不明な点が少なくありません。明治5年（1872）「日蓮宗時宗本末一派寺院明細帳Ⅱ」（東京都公文書館所蔵）によれば、明治初期の最教寺は、創立を寛文2年（1662）と伝え、「第廿七世住職日成」「弟子孝全」の僧2名で運営しており、境内は「二千五百坪」、檀家は「五拾五件」であったことがわかります。

さらに、明治10年調製「日蓮宗明細簿」（東京都公文書館所蔵）では、創立を寛永2年（1625）とし、境内「千三百坪」、檀家「五拾戸」等のほか、最教寺の什物が記載されています。それによれば、「本尊寶塔中題目〈多宝・釈迦〉・四菩薩〈文珠・普賢〉・四天王等、但木像合拾四軀」「宗祖木像三軀」「宗祖真筆曼荼羅一幅」とあり、現在最教寺に伝来している仏像と同様の名称、旗曼荼羅が記されています。では、本尊とともに記された十数体（「木像合拾四軀」）に及ぶ仏像はどのようなものだったのでしょう。

これについても、明確な資料は残されてはいません。そこで、最教寺に伝来する仏像たちを調査の成果とともに紹介します。

○愛染明王坐像

最教寺仏像調査において、最も制作年代の古い「慶長七年（1602）壬寅（寅）九月九日」が台座底辺に墨書さ

「愛染明王坐像」慶長7年（1602）9月9日　最教寺所蔵

れています。墨書からは、「播州大塩妙経寺」にて、「与左衛門」が願主となり「住寺安全坊」のもとに「尊陽院」が開眼を務めたことが記されています。妙経寺の仏像が最教寺へ伝来した経緯は不明ですが、同様の意匠をもつ不動明王とともに、ある段階で最教寺にもたらされたものであると考えられます。

○鬼子母神立像

最教寺には、17～18世紀（天女形）と19～20世紀（鬼神形）の制作と考えられる2体の鬼子母神像が伝来しています。

明治9年「邸内社堂衆庶参詣願」（東京都公文書館所蔵）によれば、鯖江藩主の間部詮勝（あきかつ）が天保11年（1840）正月に大御所である11代将軍徳川家斉の西丸老中職となった折に「鬼子母神尊像」を受贈したため、「本所小梅村三拾八番地」に堂舎を建立して祀っていました。ところが、明治9年6月に、私有地内の社堂に人々が参詣することを禁じた「御達書」がでたため、子息の間部詮道が最教寺住職の内田日成へ祭祀を依頼している由を述べ許可を願い出ています。こうした背景から、最教寺に伝来する2体のうち1体が、間部詮勝の受贈した仏像に相当する可能性も考えられます。

「毘沙門天立像」17世紀　最教寺所蔵

○毘沙門天立像

最教寺の毘沙門天立像は、調査においても、17世紀に「しかるべき伝統的な工房において」制作されたものと評価されています。最教寺は、明治35年に浅草の玉泉寺と合併していますが、明治末～大正年間にまとめたと思われる「寺院明細帳〈本所區・深川區・麻布區・小笠原島〉」（東京都公文書館所蔵）によれば、そのころの本尊は玉泉寺の「十界曼荼羅」となっていたことがわかります。さらに「境内仏堂」に本尊を毘沙門天とする「毘沙門堂」の存在が記されています。そして、その由緒は、「玉泉寺境内仏堂タリシガ同寺ノ当寺（最教寺）ニ合併スルト更ニ当寺ノ境内仏堂トナル」とあって、玉泉寺の毘沙門天像を毘沙門堂を建立して祀っていたことがわかります。

以上、調査の成果からは、現在の最教寺に伝来する仏像たちは、大正時代までの押上にあったころに祀られていた仏像であることがわかりました。そして、その仏像たちの由緒をさかのぼってみると、江戸時代以降、玉泉寺と合併する明治時代末年までの間に、段階的に最教寺に集まってきたことがうかがえます。意外なようですが、こうした他地域からの仏像の移動は、実は珍しいことではありません。墨田区は、前近代から洪水被害に悩まされ、また震災や近代には昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲によって甚大な被害を被った地域でもあります。こうした歴史のなかで、墨田区の寺院では、縁によって仏像が移動することがあったようです。詳しくは、今後の区内仏像調査に期待が寄せられるところです。

本展示では、最教寺に伝来する仏像たちを中心に、その活動や信仰を紹介していきます。約100年の時を経て故郷に凱旋する仏像たちをぜひご覧ください。　（小山貴子）

参考文献

望月真澄

『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』（平楽寺書店、2002年）

萩原哉

「調査報告 天松山最教寺の仏像彫刻」（すみだ郷土文化資料館研究紀要8号、2022年）

■ 関 連 講 座 ■

①令和7年10月18日（土）
13：30～15：30
「最教寺と旗曼荼羅信仰」
望月真澄氏
（身延山大学 特任教授）
料金600円（入館料込）

②令和7年11月22日（土）
14：00～15：30
「かえってきた仏像たち－天松山最教寺調査の成果から－」
萩原 哉氏
（玉川大学 教育博物館 准教授）
料金400円（入館料込）

会場：すみだ郷土文化資料館
研修室

9/21よりお電話にてお申し込みください。